

「モラル・エッセイ」コンテスト
優秀作品集

福島県教育委員会



「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【中学生の部】

最優秀賞

「ランドセル」

会津若松市立第二中学校

一年

伊藤 要

さん

優秀賞

「魔法の言葉」

白河市立白河第二中学校

二年

阿部 真子

さん

優秀賞

「飛行機での出来事」

白河市立白河第二中学校

三年

深津 日向子

さん

【高校生の部】

最優秀賞

「これからも私は、沢田応援団」

白河高等学校

一年

野内 佳奈

さん

優秀賞

「いちにさんし」

白河高等学校

一年

鈴木 萌

さん

優秀賞

「最初で最後の応援」

浪江高等学校津島校

三年

上田 りか

さん

【一般の部】

最優秀賞

「ふるさと」

西郷村在住

大塚 由美

さん

優秀賞

「自慢のわが校の生徒たち！」

天栄村在住

吉田 ひとみ

さん

ランドセル

会津若松市立第二中学校

一年 伊藤 要

平成二十三年三月十一日、ぼくは富岡町に住む小学二年生でした。小学校で帰り支度をしている時に、東日本大震災が起きました。

原発事故もあり、ぼくたち家族は、母の実家のある会津若松市に避難しました。まさか長期の避難になるとは思わなかったので、持ち出した生活用品もわずかな物でした。ぼくの学用品も全て富岡町の小学校に置いてきたままでした。

新年度から会津若松市の学校に通うため、教育委員会に母と行きました。手続きが終わると、ある部屋に案内されました。その部屋に入ると、たくさん学用品が積まれていました。ノートやえんぴつなどの文房具や、絵の具のセットなどが、日本中から支援物資として集まっていました。その中にランドセルもありました。ぼくが選んだランドセルにはプロ野球チームのシールがはら

れてありました。六年間使用している間についたであろう細かい傷もありましたが、まだまだ使える物です。ぼくは「どんな子が使っていたんだろう。野球が好きな子なのかな。」と頭の中で想像しました。そして、一度も会ったことのないランドセルの持ち主の子ですが、友達になったような気持ちになり、「ガンバレ」と応援されているように感じました。ぼくは、その支援物資として届けられたランドセルを背負い、始業式の日転校先の学校へ向かいました。友達は一人もいないし不安だらけでしたが、ランドセルを背負った背中が、なぜか温かく感じ、まるでランドセルに励まされているかのようでした。

あれから四年、会津若松市での生活にも慣れて毎日元気に過ごしています。一度も会ったことのないランドセルの持ち主の人に、ひとこと言いたいです。

「あなたのおかげで勇気ができました。本当にありがとう。」

魔法の言葉

白河市立白河第二中学校

二年 阿部 真子

「すみません。」

もしあなたが相手に対して親切にしてやった時、相手からこう言われたらどう思うだろうか。好意を持ってやったことなのに、「すみません」と言われたら、逆に自分が悪いことをしたのかというように感じられてしまう。「ありがとう」と「すみません」は、捉え方によっては似たような意味なのだが、不思議なことに、全く別の意味のようにも思えてくる。私がこのことに違和感を抱くようになったのは、私が体験したある出来事がきっかけだった。

七月の半ば頃に、球技大会があった。その帰りに、友達のお母さんが車で私を送ってくれることになったのだ。最初は遠慮していたのだが、暑さと、運動して疲れたせいもあって、乗せてもらうことにした。

すると、そのお母さんが急に、

「疲れたでしょう。コンビニに寄って、アイス食べようか。」

と仰いだした。本当にいきなりだったので、何と返せば良いのか分からず、返答に困ってしまった。口をついて思わず出た言葉が

「すみません。」

だった。すると、友達のお母さんは少し困った顔をして、

「真子ちゃん、こういう時は素直に『ありがとう』って言えばいいんだよ。」

と言った。車に乗せてもらってアイスまで買ってくれるなんて、と申し訳ない気持ちでいっぱい、このときはその言葉を深く考えなかった。後でよくよく考えてみると、友達のお母さんは、私が最初に書いたように違和感を感じたに違いない。

あのとき私は、謝罪と感謝、どちらも込めて「すみません」と言ったつもりだったが、相手からしてみると感謝は全く伝わってこないのだ。「ありがとう」は、自分も、相手も、良い気持ちになれる魔法の言葉だ。これからは私も、その言葉を使っていこうと思う。

飛行機での出来事

白河市立白河第二中学校

三年 深津 日向子

市の国際交流事業初日、フランスを目指し、日本を出発してから数時間後、機内食が配られた。お魚、サラダ、お水、パン、クラッカー、そしてバター。左側の座席に座る、バター嫌いの友達にバターを持ってちよっかいを出していると、肩をちよんつとたたかれた。驚いて振り返ると、右隣に座るフランス人のおじさんだった。そして、いきなり私の前でパンにバターを塗り始めた。ポカンとして見ている内に、パンにまんべんなくバターは塗られ、「OK?」

ときかれた。それでやっと、バターを持って話す私が、バターを何に塗るのが分からなくて困っているように見えたので、教えてくれたのだと理解した。私がおじさんの優しさに、慌てて、

「Thank you!」

と答え、パンにバターを塗ると、おじさんは微笑み、くるっと正

面に向き直して食事を再開した。

十二時間のフライトの中での、一分にも満たない出来事。しかし、初めての海外、言葉が十分に伝わらない、毎日の習慣も異なる環境に緊張していた私にとって、国が異なり名前を知らない私におじさんが優しくしてくれたことは、大きな支えになった。相手を思い、伝えようとする気持ちは、国なんていう枠組みを超えて、心を温かくしてくれるのだと思った。

ひとに優しくする。自分ではない誰かを中心に考えて行動することは、難しいし、とても勇気がいる。投げやりたくなるときも、見て見ぬふりをしてしまいたいことになることもある。けれども、おじさんの優しさが私にとって大きな力になったように、私も誰かの力になれることを信じ、そんな臆病な自分を乗り越えていきたい。

これからも私は、沢田応援団

福島県立白河高等学校

一年 野内 佳奈

昨年八月、私達の中学校は文化祭を二ヶ月後に控えていた。この文化祭に対する私達の思いは特別なものだった。当時中学三年生だった私達にとって最後というだけでなく、私達の中学校としても最後だったからだ。

沢田という小さな地区にある私達の中学校は、全校生がわずか四十九人。今年のある三月には統合のため、閉校を迎える予定だった。そのため、長い歴史のフィナーレを飾るのにふさわしい出し物を考えている時のこと。

「全校生で応援団をやってみねが？」

校長先生のこの一言は、まさに鶴の一声だった。中学校が閉校を迎えるとあって、沢田地区の雰囲気はどこか沈んでいた。その沢田を元気づけられるのなら、と私達は意気込んだ。

応援団の練習は朝の時間、そして昼休みを利用して毎日行われ

た。校長先生自ら応援団の指導にあたり、その熱意に引つ張られるように私達も練習に打ち込んだ。

そして迎えた文化祭当日。沢田地区からは、地域の方々をはじめ、歴代の卒業生が学校として最後の文化祭を見届けに来ていた。

「がんばれエー、がんばれエー、さアーわアーだアー！」

体育館中に響きわたるような声を張り上げながら、四十九人はそれぞれタイミングを計って振り付けを揃える。そうやって激励しながら、私は自分達はいつも沢田地区の方々を支えられてきたことを実感していた。通学時の「いつてらっしゃい」や夏休みの資源回収の時の「暑い中、苦勞さま」の声は、どこかくすぐったく、温かかった。

全校生による応援終了後、体育館は盛大な拍手に包まれた。涙を浮かべている人もいた。こうして最後の文化祭は大成功で幕を閉じたが、私はこれからも沢田を応援していきたい。地域の行事に積極的に参加するなどして、沢田をもっと元気にしていきたいと思う。

いちにさんし

福島県立白河高等学校

一年 鈴木 萌

「じいちゃん帰ろう。」

と言って、小学三年生の頃から卒業するまで、私は祖父と一緒に帰っていた。友達と一緒に帰る時も、一人の時も。そして時には傘を忘れた私にそっと傘を渡してくれた。そんな祖父が亡くなったのは、今年の四月十一日。以前から体調が悪く入院を繰り返しており、私が高校に入学した三日後の朝、家族に見守られながら亡くなった。気付いたら、私は最近祖父のお見舞いに行つてなかった。もっと祖父に会って、話してと、いろいろなことがしたかった。

祖父が亡くなった日の夜、寝ようとしても寝れなかった。そこで祖父のことを思い出してみた。すると、一つの言葉が出てきた。「いちにさんし」祖父はこの言葉を言っていたが、意味を聞いたことはなかった。私の家のすぐ近くに家があったので、よく遊び

に行っていた。嬉しかったことや悲しかったことを祖父に話したり、小学校から一緒に帰る時、祖父は必ず「いちにさんし」と勢いよく大きな声で言っていた。当時はその言葉の意味を考えたことはなかったが、今となっては応援の言葉のように聞こえる。一、二、三、四と何事も一歩ずつ着実に進んでいくことが大切なのだと。一歩また一歩と進んでいければ、どんな困難でも乗り越えられるという思いを「いちにさんし」という祖父なりの言葉に込めて言っていたのではないかと私は思っている。

祖父が亡くなってから三ヶ月がたち、私は初めての高校の夏休みを迎える。中学校とはまったく違う高校の勉強は大変で、テストもなかなかいい点数が取れない。不安で押し潰されそうになったとしても、私は絶対にくじけたり、あきらめたりしない。なぜなら、私の近くで祖父が、勢いよく大きな声で「いちにさんし」と背中を押してくれるから。

最初で最後の応援

福島県立浪江高等学校津島校

三年 上田 りか

私は、七月四日に行われた軟式野球の大会で、母校を応援に行きました。私は、今年で部活を引退して、時間があつたからです。

そしてこの夏、残念ながら私達の学校は二年後には休校が決まっています、人数も少ないので、来年はチームを組むことができないため、軟式野球部は解散することになりました。それを知り、私は彼らに想いをこめミサンガを作りました。テストも終わり、最後の大会の朝。ある部員のお母さんに連れて行ってもらい、試合を見に行きました。会場に到着すると、初めての球場の広さに驚きました。「この大会で最後になる。」ということでは、最初で最後の試合観戦に気合いを入れました。

そこで私が見たものは、かつてないクラスメートの活躍

でした。普段は大人しい友人も初めてヒットを打ちました。

そのとき私は、体が熱くなるのを感じました。その後もクラス全員が活躍していて、私はとても感動しました。津島は、福島県の中で一番狭いプレハブ校舎で、グラウンド、道具、人数も足りませんが、そんな環境のせいにはたくなくて、毎日、精一杯頑張ってきた最後の頁という言葉に、自然に体を流れる血が熱くなったのかもしれない。

結果は十五対四という結果で負けてしまいましたが、初めて応援に行つて、彼らの活躍を見ることができて、いわきに行つて応援してよかったと思うことができました。

感動をくれた、津島軟式野球部に感謝して、私も卒業まで頑張ろうと思います。

ふるさと

西郷村在住

大塚 由美

青竹色の空、山鳩色の雲。萌木の風、青丹の山、そして常磐の光。ここには、そんな緑色があふれている。この色に包まれているだけで身も心もほぐれていく。そんなかけがえない場所がある。

大学を卒業し、学友達は皆それぞれの人生を背に故郷へと帰って行った。私はある決心があり、一人灰色の東京に残った。ふくらむ夢とは裏腹に折れそうになる心を抱えての日々だった。

アルバイトを終えての帰り道。商店街のアーケードの一面。いつもの重い足取りがそこでぴたりと止まってしまった。小さな八百屋の前だった。おいしそうに並んだ赤いトマト。そして、一段高い位置に置かれた高級そうなトマト。「特別おいしいトマト」と添えられ誇らし気に皿に乗っていた。高価で手が出ないと思いつつも、その鮮やかな赤に私は目をうばわれていた。そして次の

瞬間、あふれ出た涙の向こう側に見えたのは、「南郷トマト」の文字だった。なんでと問われると答えられないけれど、涙が止まらなかった。

我が故郷は南会津の小さな農山村。トマトの里南郷である。

翌日、故郷の母から地元で栽培された尾瀬りんどうの花が送られて来た。凜として青いその花は、なつかしいふるさとの香りがした。

自慢のわが校の生徒たち！

天栄村在住

吉田 ひとみ

車椅子に乗った講師の先生が動き出そうとした瞬間、後ろからすつと出て、その車椅子を押し出した生徒がいた。「こんな風に車椅子を押すのは何年ぶりかな。」と言いながら。しかも、その際に彼が手にしていた荷物をさつと受け取って、さも当たり前のように二人分の鞆を持って歩く生徒もいた。その姿があまりにも自然で、私はつい、「ありがとう。」も言わずに、その生徒たちと歩き出してしまった。・・・これは、地区合唱祭での出来事だが、わが校には、こういう何気ない優しい振る舞いが、日常にあふれているのだ。

登校指導をしている私に対する挨拶は若干遅いのだが、道を歩く人たちに対する挨拶は実に素早く、大きな声でさわやかなものだ。「おいおい、私にもそのくらいの素早さで明るく挨拶してくれよ。」と嫉妬してしまう。「身内にだって必要なんだぞ。」と。

私がこの学校に赴任して、今年で三年目になるが、ずっと変わらずに、代々、こういうさわやかな挨拶ができる生徒たちに育っている。もちろん、地域の方々が皆さん温かく、子どもたちを地域で育ててくださっていることが大きな要因だが、それに付け加えて、在校生が新入生の手本となって率先して動いていることが、代々繋がっていつているのだろうと思う。そして、『道徳』がこういう日常の生徒活動の中で行われていることを嬉しく思っている。東日本大震災の後によく流れていたCMにもあったが、「思いは見えないけれど、思いやりは誰にでも見える。」

きつと、日本人なら、誰でも相手に対する同情や共感などの思いがあるはず。でもそれを行動に表すことができるかどうか、

「思いやりがある」と言われるか、「ない」と言われるかの違いだろう。思ったことを実行に移していくわが校の生徒たちの姿を、世の中の人たちに見てほしいと心の底から思う。

